



昭和7年、大阪での「モラロジー講習会」にて。壇上が廣池千九郎

若き人の一生を誤るなかれ

品性の向上を心として

母鳥に見守られはぐくまれた雛ひながようやく巣から飛び立てるように、若手社員を一人前に育て上げるには、企業側の労力と時間的努力、そして経営者の心構えが求められます。変化する若者意識に企業はどう対峙たいじし、何をどう教えるのか。本稿では、道徳経済一体思想の提唱者・廣池千九郎ひろいけちくろう（一八六六～一九三八）の教えを手掛かりに、若手社員が真に生きる育成法を考えます。

〈本誌編〉

Eで読み解く若者意識

近ごろの新人社員はどう育てたらよいものか——。平成世代のやる気を引き出すスイッチのありかを、二つの「E」のキーワードを元に考えてみましょう。

一つ目は「縁」。人とのきずなやつなごりを求める若者意識の実例として、指摘されるのが他人と住空間を共有する「シェア住居」の増加です。なぜ自由気ままな

一人暮らしではなく、共同生活を好むのか。そこには「自分らしさより、気の合う仲間とのつながりを重視する」新たな価値意識がある、と言われます。幼少時からパソコンや携帯電話に親しみ、下校後や卒業後もインターネットを通じて仲間とつながりを求める「常時接続世代」の彼らは、事故で仲間を傷つけるリスクを嫌ってドライブをしたがらないなど、仲間との安定した「縁」に最上の価値を

置くとされます。

二つ目は「援」。ただの観光旅行よりボランティアアターを志向する彼らの、誰かを支援したい、援たすけたいという利他的傾向は、東日本震災を機に一層強まったとされます。東京経済大学の関沢英彦せきざひこ教授は、震災後にボランティアに行った学生への意識調査の結果を元に、「シリアス」「シェア」「セルフ」「セーブ」の四つを特長とする新たな集団意識が若者に醸

成されつつある、と指摘しています（平成二十三年六月十日付『日経流通新聞』）。

もちろん価値観は多様であり、すべての若者がこうとは限りません。しかし少なくとも企業側は、仲間とのきずなや社会性に価値を置く「E」世代の新たな意識にも、目を向けていく必要があります。

です。

では、このような意識を持った若者に對して、企業側はどのような育成プランを用意すればよいのでしょうか。彼らにより関心を抱くのは、金銭的報酬の多寡みかさより、自らが従事する仕事の社会的意義や道徳性であり、その仕事の成果がどれだけ社会・公共に役立つているかの実感を重視します。仕事の生産性や経済性追求のスキルはもちろん、人と人とのきずなを生みだし、社会性ある思考や行動をはぐくむ総合的な「人間力」の育成が、企業側、新入社員側双方のニーズに沿うものとして、一層重要になると言えるでしょう。

成を核とした、若者への人づくりのあり方について考えます。

みな幸福にさする方法

廣池は、企業が若手社員に教育を行う際の指針を次のように述べています。

「金銭物質が豊富になっても人間の一生涯の安心、幸福は決して得らるるものではありません。ことに若き独身者に対して品性の教育を与えずにみだりに過分の物質を与うるときは、かえってその若き人の一生を誤るものであります」（増補版『道徳経済一体思想』六四一頁、モラロジー研究所刊）

廣池は、若手社員の人づくりは「品性」の教育を優先すべきであり、それをせずに給与・手当の拡充や福祉・娯楽など物質的提供を行えば、かえって不道徳を助長する結果となると指摘しています。

この「人間力」という言葉は、さまざまな業種業界、教育の機会において多様に解釈され、それはコミュニケーション力であったりリーダーシップであったりと、幅広い資質や能力を包含するものとして使われています。ここでは、廣池千九郎の格言「徳を尚たもぶこと学知金権より大なり」の視点から、学力・知力・金力・権力を善用する「もとになる力」である徳の育

とはいえ、新入社員の質の低下が指摘される今、「あいさつから教えないやいけのないのに、品性教育なんてとても行き着かない」という方もいるかもしれませぬ。あるいは「技術やマナーの教育なら進め方も分かるが、品性の教育は方法が分からない」という方も少なくないでし

よう。

「品性」の教育とは何を教えるべきか。次の一文が参考となります。

「従業員側よりいえば経営者側が従業員側に対して品性の教育を与えてくださるほうが従業員にとりてははるかに大なる恩沢であります。従来の普通徳徳では一方は利益を得ても一方または双方は損をするのであります。これでは真の道徳ではありませぬ。真の道徳と申すは自分も相手方も第三者もみな利益を得、幸福になる方法を指すのであります」(前掲書)

近年、取引の多様化に伴い、自分も相手方も双方に利のある「Win-Win」の実現能力が、ビジネススキルとして重視されています。相手との信頼関係を築き、仕事を円滑に進めるこうしたスキルなくして「一人前」の社会人とは言えないでしょう。廣池はこの自分と相手方に加え、第三者の利も調和させなければ安心と幸福は得られないとし、その「三方よし」を実現する「品性力」を養育することが、企業側、従業員側双方の益となる、と説いているのです。

いわば品性教育なくして、一人前人間とは言えない、となるでしょうか。それでは、若手社員の品性はどのような

『道徳経済一体思想』六四〇頁

ここには、側近の若者を自己の所有物として便利に使うという思惑は感じられません。むしろ、本人の幸福と社会の公益増進を願い、若者という社会の共有物を一時的にお預りして、養育するかのような姿勢が垣間見えます。

鷺津氏は、こうした廣池自身の全人格が醸す、子を思う親心のような温かさに、言外の感化を得たのかもしれない。

雛鳥を擁するいついかに

もつとも、経済性を追求する会社組織において新入社員には、投下した教育費に見合う貢献を得るべく、一刻も早い戦力化を図る必要がある、その教育に親心のような甘さは不要だ、という考え方も当然あるでしょう。しかし近年の「縁」や「援」といった精神価値に重きを置く若者の傾向や、企業の価値を業績ではなく、関わるすべての人をどれだけ幸福にできているかを尺度に評価する動きなど、会社を取り巻く社会構造は、少しずつ変わりつつあると言えます。

ITCソリューションを手掛ける㈱アイエスエフネットでは「会社は家族、社

に教育していけばよいのでしょうか。

品性をどう育てるか

人と人とのきずなを感じられる温かな人間関係の職場を渴望する若者たち。その思いは、実社会でどれだけ満たされているでしょうか。

少なくとも、彼らに対して「品性」を説くべき上司の足元に、冷え切った人間関係があつたとしたら、若者たちはその教育を素直に受け入れられるものでしょうか。廣池はこう指摘しています。

「学問もしくは知識は『受け売り』にてその伝達の目的を達することが出来ませんが、自身の実行せぬ最高道徳を他人に話すも、他人を感化する力はありません。(略) 最高道徳は、その道徳の精髓に対しては、必ずその実行を要求するのであります」(新版『道徳科学の論文』⑧二五八頁)

大正十五年、還暦の年に『道徳科学の論文』を脱稿し、総合人間学「モラロジー」を創建した廣池は、以後の人生をその普及に捧げ、多くの前途ある十代、二十代の若者を書生や側近に置き、日常から指導を与えました。その一人、鷺津邦正氏

長は親」を掲げ、入社時にすべての社員に対し、配属先の上司とは別に、「親」となる先輩や管理職を取り決め、擬似家族としての組織体系をつくる「コア制度」を実施しています。親と子は、小さな悩みや喜びを共有し合い、親役は休日でも子役の相談に真摯に向き合うといった、家族のような緊密なコミュニケーションで、互いを結びます。同社の渡邊幸義社長は「親は、手間のかかる子に一番時間をかけます。多くの手間や時間をかけて結果が出たとき、家族としての結束は強まります。会社も同じで、手間のかかる社員に労力を割くことで結束するので」と述べています(『会社は家族、社長は親』一八五頁、PHP研究所)。

品性とは、目に見えない精神の力です。それをはぐくむには、教える側と教えられる側の精神的つながりと、そのつながりを通じて注ぐ温かな感化の教育こそが、迂遠のようで最も効果的であると言えそうです。「教育」や「育成」に使われる「育」の字の読み「はぐくむ」とは、親鳥が雛を自らの羽で包み、体温をもつて温める「羽庇む」からきていると言われます。廣池は、はぐくむポイントを次のように述べています。

は、その感化力について次のように語っています。

「私どもは(廣池)博士から呼びすてにされても、だれも怒りませんけれども、博士は、『誰々さん、これこれやつてくれ』と、必ず『さん』づけされる。これはなかなかできないことです。そういう点、どんなときでも相手を尊重される。尊重するからといって、それじゃお世辞を言われるかというと、そうじゃないですね。心の中でも非常に尊重していなさる。だからどんな人間でも夢中になって働くのですよ」(『谷川温泉の由来』一三頁、モラロジー研究所刊)

名前に「さん」が付けられるかどうかというわずかな違いに、鷺津氏はなぜこころも反応したのでしょうか。「心の中でも非常に尊重していなさる」との実感を、どこから抱いたのででしょうか。その理由を推測する上で、次の言葉がカギとなります。

「安心、幸福を得るようになってきたとき、あるいはまたそれが別々になって従業員側の人々が後日たとい独立することになつても立派な一人前の人物として進めるように、その品性を造り上げてその新運命を開かせようとするのであります」

「相手方の中には我慢強き者あり、我慢強き者あり、鈍感の者あり、愚劣の者ありて、指導の困難予想外の者もあるも、あるいは叱りあるいは撫で、気永く、粘り強く、赤子を抱くごとくに、母鳥の雛鳥を擁することくに、羽庇んで開発して進むのであります」(改訂『廣池千九郎語録』一五一頁)

教育は国家百年の計。国家と会社の永続に資する若人の「一人前教育」に、粘り強い取り組みが期待されます。

